〔表紙写真解説〕

表紙写真は昭和五年発刊の地理書より引用したもので日本セメント佐伯工場の景観である。同書に「佐伯湾は自然の良港湾をなし、内に幾多の島嶼あり、風景に富む。湾内に海軍の貯炭所あり、又海軍練習地となって軍事上重要な所である。写真は湾の西部、海崎の日本セメント工場である。この付近はセメント原料たる石灰岩を産し且交通の便がよいので大なる工場があって盛に製出し、各地に輸送している（一年産額百万樽）」とある。

八幡地区海崎にある日本セメントの起りは、大正十五年（一九二六）三月、東上浦村（現・上浦町）出身の実業家曽根茂夫によって誘致された。当初の総建坪一万五千坪、工費三百五十万円を要した最新式セメント工場である。

昭和三年（一九二八）四月、浅野系会社となる。最初原石を蒲戸から採掘していたが、昭和五年ごろから狩生地区の原石を採掘、空中ケーブルで工場に搬送した。海崎地域は同工場の操業によって発展、小規模ながら一つの商業圏を形成している（引用資料は『日本地理大系第九巻・九州篇』（改造社　昭和五年）・『佐伯市史』を使用しました）。

（矢野）

府坂峠

府坂峠は堅田川と大越川の両流域を結ぶ、標高五〇㍍ほどの峠である。堅田川は府坂のあたりで大きく曲流し、大越川と背中あわせの状態となる。このため、峠は小さく低いが、堅田側はちょっとした急坂。

越せば岸河内集落の約一㌔上流に出るが、峠路は大越川のほとりをさらに一㌔ほどさかのぼって川を渡り、左岸の道に連結する。

豊薩の戦いにおける堅田合戦最後の白兵戦が展開されたのが、この河原。大越川右岸の長瀬原である。堅田川流域で佐伯方に圧迫された島津軍は、府坂峠を越えて、この河原に下る。峠の激戦のあと、一息つく間もない島津軍に襲いかかったのは、岸河内に待ち構えていた佐伯方の別動隊因尾衆の二百余人である。

『大友興廃記』にこんな話がある。佐伯方に矢野美作守という老武者がいた。かねて佐伯惟定から不審をこうむっていたが、ここで功名をあげれば帰参もかなうと先がけを心がける。

そこに現われたのが島津方の大男。槍を合わせて戦ったが、老いた美作守は川瀬の石につまずいて転び、首をとられる。これを見たのが長男の矢野大炊介。親のかたきを討たずば二度と味方の陣に帰らないとあとを追い、ついに大男を討つ。奪い返した親の首を敵の羽織に包み相手の首を刀に貫いて佐伯の陣に戻った。

こうした殺し合いがあちこちで繰り広げられる。やがて佐伯方には府坂峠を越えて追ってきた本隊に加わり、谷にかくれ山にひそむ島津軍兵をとり囲んで討った。大勝した佐伯方は敗走する敵を追って大越まで行ったが、午後五時になって日暮れも迫ったので引きあげた。

こうして堅田合戦は終った。だが、戦いに死んだ兵士らの怨念は長く消えず、その後、幽鬼となって付近をさまよったという。

このためぐっと時代も下った文政五年（一八二二）正月、堅田の大庄屋芦刈八郎兵衛らによって、大越川のほとりに敵味方供養のための「日輪当午塔」が建てられた。俗に千人塚と呼ばれる。一方、府坂の方にも三ツ塚と呼ばれる塔がある。これは天正十四年（一五八六）の合戦から十年後の文禄四年に建てられている。（『佐伯市史』・『大友興廃記』・『大分合同新聞―峠シリーズ㊹』より）